

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に [16]

キケロ『義務論』より — 動詞*iungere*「結ぶ」をめぐる —

秋山 学

今月はキケロ『義務論』からテキストを選んでみることにしましょう。

原文 Optimē autem societas hominum coniunctiōque servabitur sī, ut quisque erit coniunctissimus, ita in eum benignitatis plūrimum conferetur. Sed, quae naturae principia sint communitatis et societatis humanae, repetendum videtur altius; est enim primum quod cernitur in universi generis humani societate. Eius autem vinculum est ratio et oratio quae docendō, discendō, communicandō, disceptandō, iudicandō conciliat inter se hominēs coniungitque naturā quādam societate; neque ullā re longius absumus a naturā ferarum in quibus inesse fortitudinem saepe dicimus — ut in equis, in leonibus — iustitiam, aequitatem, bonitatem non dicimus; sunt enim rationis et orationis expertes. — *De officiis*, I, XVI, 50.

仏訳 La meilleure façon de respecter le lien social entre les hommes et leur union, sera de montrer, à l'égard de qui nous est le plus proche, d'autant plus de bonté. Mais pour voir quels sont les principes naturels de la communauté sociale entre les hommes, il faut, semble-t-il, remonter plus haut. Il y a d'abord en effet ce que l'on observe dans la société du genre humain tout entier. Le lien de cette société, c'est la raison et la parole, qui par l'enseignement et l'étude, en permettant de communiquer, de discuter et de juger, associent les hommes entre eux et les unissent dans une sorte de société naturelle. Et rien ne nous éloigne davantage de la nature des bêtes : nous disons souvent qu'elles ont le sens de la justice, de l'équité, de la bonté, car elles sont privées de la raison et de la parole.

訳 人間の社会およびその結びつきとは、次のような場合に最も良く維持されるであろう。それはつまり、強く結ばれた者であればあるほど、それだけ一層、その者に対して大きな親切心が向けられるというあり方である。けれども、人間の共同体と社会の諸原理が、いかなる本性に基づくものであるのかについて、より深く追究せねばならないと思われる。ここで第一の原理とは、人類の社会のうちに普遍的に認められるものである。しかるに、人間社会の絆とは理性と言論であり、これは教え、学び、意思疎通をし、議論をし、判断をすることによって、人間たちを相互に和合せ

るとともに、言わば自然な社会形成を通じて、人間たちを結びつけるものである。われわれは野獣どもの本性から隔たっているが、これほどまでにわれわれがそこから遠く隔たっているものは他に存在しない。われわれはしばしば「野獣どもには剛毅が備わっている」——例えば馬や獅子のうちに——と言うが、「正義、公正さ、善性が備わっている」とは決して言わない。なぜなら野獣どもは、理性と言論に与っていないからである。

上の一節に述べられているように、古代社会にあつて理性と言論とは、われわれが意識する以上に緊密なつながりを持つものでした。今回は「結びつける」を意味する動詞 *coniungō* (不定詞は *coniungere*) について考えてみましょう。

上掲の文中には、この *coniungere* という動詞から展開・派生した語彙が多く見られます。この動詞は、*iungō* (「結ぶ」; 不定詞は *iungere*) という基本動詞に、前置詞 *cum* (「〜と共に」) が姿を変えた *con-* という前綴りが接したものです。ラテン語では、①直説法能動相現在1人称単数、②直説法能動相完了1人称単数、③完了(受動)分詞男性単数主格を「三基本形」と位置づけますが、*iungere* に関してこの三基本形を提示すると、① *iungō*、② *iunxi*、③ *iunctus* となります。前綴りの *con-* を伴う合成動詞形は、動詞本体の *iungere* をこのように活用させた後に、改めて前綴りを添えることで得られます。ちなみに上掲の一節に現れる、ア) *coniunctiō* は、③の完了受動分詞形の幹部分(「目的分詞幹」; 2015年1月号参照)に、接尾辞 *-iō* を付して形成された名詞(「結びつき」)であり、イ) *coniunctissimus* は、同じく③の完了受動分詞すなわち形容詞形(「結びつけられた」)の最上級の男性単数主格形です。また、ウ) *coniungit* は、上記①の3人称単数の活用形です。なお *-que* は、二番目の語群の最初の語に後接する接尾辞で、上記の一節では意味上、*conciliat* と *coniungit* をつないでいます。ちなみに綴り字の上で、*coniungere* を *conjungere* と記すこともよく行われます。

さて、*iungere* は仏語に入つて *joindre* となり、これが英語では *join* となりますね。ただラテン語の名詞形 *iunctiō* は、英語では *junction* (⇒高速道路などの「結節地点」)となり、仏語の *jonction* に比してラテン語の綴りをよく留めています。なお印欧祖語に近いサンスクリットにおける動詞語根は *√yuj* で、「くびきにつける」という原義から (cf. 英語の *yoke* 「くびき」、やはり「結ぶ」といった意味を持ちます。この *√yuj* が名詞化すると *yoga* (o 字は長音で「ヨーガ」) となり、インドの宗教では個人の靈魂と「世界靈魂」との「つながり」「結合」を目指す行を意味すること、一方仏教ではこれが「瑜伽行」となって唯識説へと展開し、奈良の薬師寺や興福寺などの法相宗へと結実することに関し

(あきやま・まなぶ)